

序

家根祥多教授が忽然として逝かれたのは、二〇〇一年四月二十八日早朝のことでした。享年四十七歳、研究者として教育者としても円熟の度を深め、ますますの活躍が期待された時期の、痛恨の別れというほかありません。あれから早くも二年が経とうとする今、立命館大学（文学部）人文学会は、追悼記念の論集を編んで霊前に捧げ、先生が本学に勤務された十余年を偲ぶよすがといたしたく思います。どうかよろしくご受納ください。

法名を釈浄祥と号する家根先生は、一九七八年三月に京都大学文学部史学科考古学専攻を卒業、八三年三月に同大学院文学研究科博士課程を中退してただちに帝塚山大学教養部助手となられ、ドイツ留学などを経て、八八年四月、立命館大学文学部における学芸員課程の充実と専攻教学強化のため、史学科日本史学専攻助教として来任されました。当時先生は三十四歳、気鋭の若手考古学者として、熱い期待をもって本学に迎えられたのです。

以来十三年間、期待に違わず先生は研究と教育に尽力され、今や本学における考古学分野は、学部・大学院ともに充実し、毎年有為にして多数の卒業生を、社会や学界に輩出するまでになりました。またこの間、みずからは九六年に教授に昇任、しばしば入学試験の責任者や専攻主任の重責を担われました。

家根教授が心血を傾けて取り組んできた研究テーマは、縄文時代から弥生時代へ移行する過程の解明であり、研究方法上の特色は、極めて厳格な手続きを経た、縄文後期・晩期における土器の編年論に認められます。こうした研究の蓄積を基礎に、近々に集大成が期待され、かつ日本とヨーロッパにおける先史文化の違いを析出するという、スケールの大きな学問の形成を目指していました。

志半ばにして生涯を閉じられた先生の胸中は、察するに余りあります。しかし現在、本論集のほかに、教え子はも

とより友人・知友らによる（追悼）考古学論集や、ご自身の遺稿集の企画・編集が進行中ですし、昨年の一周年には、約一五〇名にも及ぶ方々がその想いを綴った追悼文集が刊行されました。学部長室には、家根教授が発掘指導された長野県宮崎遺跡から出土した優品を収める展示ケースも設置されています。こうした企画・事業の資金の一部には、実は、先生の歿後ご両親様より学園に贈られた多額の寄付が充てられています。

先生の肉体は滅びても、われわれとを結ぶ心の絆が綻びることはありません。私たち文学部教職員・学生一同は、先生の長年に亘るご貢献とご両親様のご厚情に、ここに改めて深い謝意を表し、故家根祥多立命館大学教授のご冥福を、衷心よりお祈り申し上げる次第です。

二〇〇三年一月二十日

立命館大学人文学会会長

文学部長 杉 橋 隆 夫